
ひぐらしのなく日に

坂田銀時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく日に

【Nコード】

N4696T

【作者名】

坂田銀時

【あらすじ】

季節はひぐらしが鳴く夏、雛見沢に五人の女子高生が軽音部の合宿という目的で向っています。私たちは、ニコニコと笑いながらバスの中でしゃべっていた。だが、この時私たちは、雛見沢で毎年行われる夏祭り『綿流し』の日にまさかあんな残酷な運命に巻き込まれることになるとはまだ知らなかった……

今回の作品は、長月実さんが執筆した「けいおん！×ひぐらしのなく頃に」と話の設定が似ていますが、ご本人様から了承を頂いてお

ります。

プロローグ

季節はひぐらしが鳴く夏、雛見沢に五人の女子高生が軽音部の合宿という目的で向っています。私たちは、ニコニコと笑いながらバスの中でしゃべっていた。けれど、私たちはまだ知らなかった。それは雛見沢で毎年同じ日に起きる惨劇、一人が死に一人が消える。あの惨劇は再び繰り返されるのかそれとも……

「けいおん!」と「ひぐらしのなく頃に」のコラボ小説です。今回は、プロローグだけです。本編の方は6月28日より公開いたします。

製作

ひぐらしのなく日に製作委員会

記念作品製作プロジェクト

合宿編 其の壱

季節はひぐらしが鳴く夏、雛見沢に五人の女子高生が軽音部の合宿という目的で向っています。私たちは、ニコニコと笑いながらバスの中でしゃべっていた。だが、この時私たちは、雛見沢で毎年行われる夏祭り『綿流し』の日にまさかあんな残酷な運命に巻き込まれることになるとは、私も含め誰も思っていないませんでした。

都会育ちの女子高生五人を乗せたバスは、ゆらりゆらりと揺れながら舗装されていない山道を登っていた。

「ねえ、むぎちゃん」

私が流れていく景色を見ていると唯先輩が前の座席に座っていた、むぎ先輩に声掛ける。

「なあに、唯ちゃん」

と後ろを振り向いて、言った。

「むぎちゃん、今から行く雛見沢って一体どんなところなの？」

「雛見沢はね、空気がとてもおしくて、とっても静かなところよ」

「そうなんだ、なんか楽しみだなあ」

とさらに、テンションを上げて唯先輩の隣に座っていた律先輩とはしゃいでいると私の隣に座っていた零先輩が

「おい、二人ともちよつとはしゃぎ過ぎじゃないのか」

と二人を注意したけど、律先輩が

「いいじゃん別に、年に一度しかない合宿だぞ！ しかも去年は、海で今年は山だぞ。こんなに贅沢に合宿できるのは軽音部くらいだぜ」

とさらに律先輩は、唯先輩とはしゃぐ。

「へえ、去年は海に行っただんですか？ 零先輩」

とさっきまで窓から見える景色を見ていた、私が零先輩の方を向いて言った。

「うん、去年はむぎの別荘で合宿したんだ。でも、結局は遊んだだけだったけどな……」

と言った後、漣先輩は暗い顔をした。

「そうだったんですか、むぎ先輩の別荘って広いんですか？」

と私はさらに、漣先輩に質問した。

「そりゃ、もう広かったぜ。なあ、むぎ」

律先輩がそう言うのと、むぎ先輩は申し訳なそうに

「今年は本当に、ごめんなさい。本当は、今年も使えるはずだったけど今改装工事していて空いていなくて、だから今年は私の知り合いの園崎さんっていう人の別荘を借りることになったの、本当にごめんね」

と私たちに謝った。

「いいよ別に、謝らなくても。それより、よくその知り合いの人別荘貸してくれたね。普通なら、知り合いのために別荘貸す人なんていないだろう」

と漣先輩が言った。

確かに、親戚とかに別荘を貸すなら分かるけど知り合いのために別荘を貸すなんて、どれだけ心が広いんだと私は思った。

「今度、雛見沢でお祭りがあるんだけどその準備を手伝ってくれたら、別荘を貸してあげるって言われたの」

「ちよっと待って、お祭りの準備を手伝うのか？そんなの聞いてないぞ」

と律先輩が話の中に入ってきた。

「急いで決めたらからみんなに言うのが遅くなっちゃたの、ごめんなさい」

とむぎ先輩は、再び謝った。

「まあ、みなさん。別荘を貸してくれるんだし。それくらいは手伝ってあげましようよ」

と私は、すかさずむぎ先輩をフォローした。

「ま、確かに梓の言うとおりだな」

澪先輩が言った瞬間、バスのアナウンスが

「次は、雛見沢、雛見沢です」

と鳴った。

「あ、やっと着いた」

唯先輩が嬉しそうな顔をして言った。

「よし、みんな降りるぞ。荷物忘れるなよ」

と律先輩が呼びかけ後、私を含め全員バスを降りる準備をしバスを降りる。

バスが雛見沢の停留所に着くと私たちはバスから降り、バス停からバスが発し走っていくの見送った後、唯先輩が

「空気おいしいねえ」

と深呼吸をして雛見沢の空気を味わっている。

「そうですね、私たちが住んでいるところとはまったく違いますね」
私も、雛見沢の空気を味わう。

「確かにおいしいな」

「そうだねえ」

と私たち五人は、雛見沢の空気を味わいむぎ先輩の知り合いが貸してくれた重い荷物を持って別荘へと向かった。

この時、うるさいほど鳴いていたひぐらしはを私たちに教えようとしていたかもしれない……これから起きる惨劇を

合宿編 其の壱（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回の作品「ひぐらしのなく日」は、「小説家になろう」に登録して一周年を記念して製作した作品です。この度ブログで「二次小説発表会（夏）」をやりました。小説の読者数の発表や重大発表をしております。

ブログ ←

二次小説の館 ←

<http://ameblo.jp/sakaginntoki/>

二次小説の屋敷 ←

<http://sakataginntoki.blog.so-net.ne.jp/>

合宿編 其の貳

今私たちは、むぎ先輩の知り合いの別荘に向けて自分たちの重い荷物を持って汗を流しながら急な坂道上っていた。

「あゝっい」

と暑いのが苦手な唯先輩が、背中を曲げ、手をブラブラとさせダラダラと歩きながら言う。

「唯ちゃん、もうちょっとがんばって。別荘に着いたら、おいしいケーキがあるから」

そうむぎ先輩が言うと、唯先輩は「ケーキ」という単語を聞いた瞬間、さっきまで背中を曲げてダラダラと歩いていたのに、まっすぐ背を伸ばしてすたすた歩いて行った。

「はあ、唯先輩。「ケーキ」って聞いた瞬間、一気にテンションあがりましたね」

と私は、隣にいた澪先輩に声を掛ける。

「そうだな、唯は食べ物には弱いからな。……ん？」

さっきまで歩いていた澪先輩は、足を止めて古びた看板を見ていた。「どうしたんですか、澪先輩？」

「梓、これ見て」

と言うと澪先輩は、看板を指をさす。看板を見てみるとそこには『ダム建設反対！』と大きな文字で書かれていた。

「なにか、あつたんでしょかね？」

と私が、首を傾げて考えているとむぎ先輩が

「ああ、それ。実は昔、雛見沢村にダムを建設する話があったの。でもそのダムを建設すると村ごと沈むっていうことになっていたの。それで、ダム建設反対派の人たちが団結してダム建設反対運動をやったって聞いているわ」

「そうだったんですか」

私は、驚いた。こんなに素晴らしい景色があって空気がいっぱい場

所が、ダムのために沈められるなんて想像もつかなかったらだ。

「むぎつて、雛見沢のこと詳しんだ」

「うん、雛見沢のことは何度も知り合いの方からお話を聞いていたの」

「そうなんだ」

と澪先輩と私は、むぎ先輩のおかげで雛見沢のことを少しだけ知れたのであった。

別荘に着くまで私と澪先輩は、むぎ先輩から雛見沢のことについていろいろと教えてもらっていた。そうしていると、むぎ先輩が「みなさん、ここが園崎さんちの家です」

と説明した。私たちは持っていた、荷物を降ろして園崎さんちの家を見た。

「でけえ」

「でか過ぎる」

「……でかい」

「大きすぎます」

と律先輩と唯先輩と澪先輩と私が家の大きさを見て驚いた表情をしているのに、むぎ先輩だけは普通の表情をしている。

「園崎さんつて、山を二つ丸ごと持っているのよ」

「丸ごとですか!」

私はさらに驚いた。まさか、山を二つしかも丸ごと持っているなんて……すこすぎる、さすが別荘も地の大富豪。

「それじゃ、鳴らすね」

そう言うともぎ先輩は、ドアの横にあったインターホンを押した。

「はい」

とドアの向こう女の子の声が聞こえた。そして、鍵を開ける音が聞いた後ドアが開いた。

「久しぶり、魅音ちゃん」

「久しぶりだね、元気にしてた?」

と背が高く胸も大きく、緑色の髪の毛で長いポニーテールをした女の子が出てきた。

「うん、元気になっていたよ」

むぎ先輩が、ニコニコと笑いながら言った。

「あのう……」

唯先輩が、動揺しながら二人の会話の中に入り

「は、始めまして、わ、私平沢唯って言います。よろしく願います」

唯先輩が、魅音さんに自己紹介すると魅音さんは笑顔で

「そんなに、緊張しなくてもいいよ。私の方が年下だし」と言った。

まさかの年下発言を聞いて、私は驚いた。こんなに胸が大きくて、スタイル抜群なのに唯先輩たちも年下とはまったく、分からなかった。

「魅音ちゃんは、今年で中学三年生なのよ」

私は、さらに驚いた。まさか、私の一つ下とは……

「初めまして、中野梓です。よろしく」

と私は驚きを隠しながら、リラックスした声であいさつをした。

「あたしは、田井中律。よろしくな！」

「私は、秋山澪と言います。よろしく」

軽音部全員の自己紹介を済ませると、魅音さんが

「それじゃ、今から別荘に案内するからおじさんに着いて来て」

おじさんと言うのは恐らく、魅音さん自信のことを言っているのであろう。

「それじゃ、行こうか」

と言って、降ろしていた荷物を持って魅音さんの後を追った。

合宿編 其の参

私たちが案内された別荘は、周りが山でとても大きな立派な家だった。家の横には、倉と思われる建物があった。

「その倉、楽器を置くなり好きに使っていいから」

「うん、分かった。ありがとね、魅音ちゃん」

むぎ先輩と魅音さんが仲良く話していた。二人が話している間、私と唯先輩と律先輩と澪先輩は自分たちの楽器を倉の中に入れていた。しかし、本当にでかいな」

律先輩が、バスドラムを倉の中に運び入口の端っこに置きながら言う。

「本当に、でかいですよね」

と律先輩といっしょに倉の大きさに驚いていた。そして私は、ギターを入口のすぐ横に置いて倉の奥の方へと歩いて行ったら、奥には古い農具や缶詰や農薬などが大量に置かれていた。

「すごい量ですね」

「そうでしょう、ま、昔園崎家はこの辺りの地主だったから、こういうもんがうちにはいっぱいあるんだよ」

と魅音さんが、丁寧に説明してくれた。

「そうなんですか」

私が、納得した顔して言う。と唯先輩が倉の扉の向こうから

「あずにゃん、魅音ちゃん。早く別荘に行こうよ。おいしいケーキが待っているよ」

と私たちを呼んだ。

「はい、すぐ行きます」

「それじゃ、行こうか」

「はい」

私たち倉から出て、魅音さんの別荘へと向かった。

「広い、和室だなあ」

漣先輩が、目を大きく開けていた。その部屋には、立派な掛け軸や日本刀、甲冑といったいかにも和室にふさわしい三点が置かれていた。

「すごいなあ、これ本物かなあ？」

と唯先輩が、和室に置かれていた日本刀を持って鞘から刀を抜きとった。

「ちよつ、唯先輩。危ないですよ、それ本物だったらどうするんですか？」

私は、唯先輩を叱った。もしこの刀が本物だったら、かなり危険だし、しかも、それを持っているのが唯先輩だからもつと危ない。

「あずにゃん、叱られた」

そう言いながら唯先輩は、刀を元の位置に戻した。私に叱られたのがシヨックだったのかは分からないが刀を戻す際、唯先輩の目には涙が浮かんでいた。

「あれ、そう言えばむぎと魅音は？」

漣先輩が周りキヨロキヨロと見渡して言った。をそう言えば、さっきまで一緒にいたはずのむぎ先輩と魅音さんの二人がいなくなっていた。

「みんなあ、お待たせ」

とむぎ先輩と魅音さんが現れた。むぎ先輩は、コップを乗せた御盆を持っていた。

「むぎ先輩、どこに行っていたんですか？」

「ちよつと、魅音ちゃんと一緒にお茶入れたの」

「うん、むぎってお茶入れるの得意だねえ」

「そんなことないわよ」

と言いながらコップを机の上に置き、かばんからケーキの箱を取り出し皿に盛り付けた。

「わあ、やっとケーキ食べられる」

唯先輩が、だれよりも早く椅子に着席し自分のところにケーキが回

って来るの待った。やっぱり、唯先輩は「ケーキ」という単語にはめっそう弱いんだなと改めて思い知った。

「それじゃ、私ちよつと出かけてくるわ」

「魅音ちゃんも、ケーキ食べようよ」

「食べたいけど、ばっちゃんに呼ばれているから」

と言つて、その和室から出ようとした時ふと振り返つて

「言い忘れていたけど、ケーキ食べた後でもいいから、あとで古手神社に来てくれないかなあ。むぎ、古手神社の場所分かるよね？」

「うん、分かつてるよ。それじゃ、あとでね」

「またあとで」

そう言い残すと、魅音ちゃんは和室の部屋から出ていった。魅音ちゃんが出て言つた後、私たち五人はケーキを食べてそのあと少しだけ話して、古手神社に向つた。

合宿編 其の四

むぎ先輩からもらったケーキを食べた後、私たちは魅音さんが呼んだ場所に向っていた。そして、古手神社へ連なる長い心臓破りの階段をひたすら登っている。

「なあ漣、抱っこして〜」

「お前は、赤ん坊か！これくらいの階段、上がれるだろう」

「でも、この階段長すぎる」

と律先輩は漣先輩にダダをこねている。

「律先輩、あとちょっとですから、がんばりましょうよ」

律先輩の背後から、私は言った。

「梓は、疲れていないのかあ」

「私は、大丈夫ですよ。これくらい、楽勝ですよ」

と苦い笑いしながら言った。本当のところ、こんな長い階段を上ったのは生まれて初めてかもしれない。

「はあはあ、やっと、やっと上りつきたっぞ！！」

律先輩が、息を切らしながら大声で言った。心臓破りの長い階段を上り、古手神社がある場所に到着した。

「あずにゃん、疲れたよ〜」

と言いながら、唯先輩が私に抱き付いてきた。

「ちょ、やめてくださいよ」

と唯先輩を離しながら、私は神社の境内の様子を見た。境内には、この神社を管理している事務所と思わる建物があった。その建物周辺には、『ダム建設反対！！』『離見沢にダムはいらん！！』などの幟が掲げられていた。

「ここ、ダム建設反対派の本部があつたから」

見知った声が聞こえたから、後ろを振り向いてみるとそこには魅音さんがいた。

「あ、魅音ちゃん」

むぎ先輩が、言った。

「やっと来たね。ちよっと、みんなに紹介したい人がいるから、ちよっと待ってて」

そう言っと、魅音さんはまたどっかに行った。そして数分後、今度は女の子3人と男の子1人を連れてやってきた。

「それじゃ、紹介するね。白い帽子の子が竜宮レナちゃん」

「はじめまして、竜宮レナです。よろしく」

と丁寧にあいさつをする。

「で、私たちが通っている学校で唯一の男子、前原圭一」

「よろしく」

「それで、カチューシャをしている子が北条沙都子ちゃん」

「よろしくお願いしますわ」

とお嬢様口調で言う。

「そして、この子が古手神社の巫女の古手梨花ちゃん」

「はじめましてなのです、よろしくなのです」

と巫女の格好をした、この中で一番おとなしそうな子が笑顔で言う。
「うちら、雛見沢で唯一の部活のメンバーなんだ。これから、よろしく」

と私たちは、雛見沢での唯一の部活のメンバーの紹介を受けたのであった。初めて見た時は、みんな個性が強い人たちなんだなあと感じた。

自己紹介が終わった後、私たちも自己紹介をした。私隊の自己紹介した後、私たちは翌日行われる夏祭りの準備を手伝った。テントを張ったり、射的の景品が入った段ボールを運んだり私たちは明日の祭りへと向けて一生懸命汗をいっぱいかいて日が暮れるまで手伝った。

手伝いを終えて、私たちは外灯もない暗い夜道を歩く。怖がりの漣先輩は、律先輩にひつついていた。

「ああ、こりや明日筋肉痛になるわ」

律先輩が、肩を回しながら言う。

「今日は、結構働きましたからね」

「そうだな」

暗い夜道を仲良く話ながら歩いて行った。

「ねえ、みんな空見て」

と唯先輩が突然言い、空を指差した。空を見てみると、空にはきれいな星空が見えた、私たちの町では絶対に見れないほど星が輝いていた。

「すごいな、こんなにきれいな星空生まれて初めて見たよ」

漣先輩が、嬉しそうに空を見ながら言う。

「そうね、この離見沢でしか見えない空だね」

と私の横にいた、むぎ先輩が目を輝瘦せながら笑顔で言う。

暗い夜道を歩き終え、私たちは魅音さんの別荘へと着いた。今日は、疲れたという事で練習はなしとなり、みんなに眠りにつく。

今日は、いっぱい離見沢のことについて知れたと思う。でも、まさかこんなに平和でのどかな離見沢であんな事件に巻き込まれることになるとはまだ誰も思っていなかった。

合宿編 其の伍

みんながぐつぐつと寝ているとき、私は無性にトイレに行きたくなり私はトイレに行っていた。そして、トイレを終えて部屋へと戻っているとき外から声がしたから私は、窓のから外を見た。そこには、きれいな体型をした女の人と大きな男の人がいた。

私は、不思議に思い外に出て二人のそばに行き

「あのう、こんなところで何やってるんですか？」

と聞く。そしたら、カメラを持っている男の人が

「ああ、今写真を撮っていたところなんだ。ところで君は、雛見沢の人かい？」

「いえ、私は軽音部の合宿で雛見沢に来たものです」

「へえ、合宿か。あ！自己紹介が遅れたね、僕の名前は富竹ジロウというんだ、フリーのカメラマンでときどき雛見沢に来て雛見沢の美しい景色を写真を収めているんだ。そして、この女の人が鷹野三四さん。入江診療所で看護婦をやっているんだ」

「はじめまして、鷹野です。よろしくね」

と鷹野さんがあいさつをした。

「初めまして、中野梓といいます」

と私も自己紹介をする。

「ねえ、梓ちゃん。明日行われる綿流しのお祭りを知っている？」

鷹野さんが、怪しいオーラを出しながら私に聞いた。

「はい、知っていますけど。たしか、布団や座布団の綿に感謝して川に流すお祭りでしょう」

と鷹野さんの質問に答える。

「じゃ、「綿流し」の本当の意味を知っている？」

「本当の意味ですか？」

私は疑問に思う。綿を流すから「綿流し」って呼ぶと思っていたのに別の意味があったなんて

「うん。明日、そのことを教えてあげるから明日、梨花ちゃんの祭事が終わった後祭具殿に来てくれないかしら」

自分自身でもなぜか分からないけど、私は興味本意で

「分かりました」

と鷹野さんたちと明日、祭具殿で会う事を約束した。

「それじゃ、また明日ね」

「じゃ、お休み」

二人と別れた後、私はみんながいる部屋に戻った。

部屋に戻ると、さっきまで寝ていたはずのみんなが起きていた。

「どうしたんですか？」

と自分の布団に戻りながら言う。

「あずにゃん、どこに行っていたの心配したよ」

唯先輩が心配そうな顔をして、私を見つめる。

「ちよつと、トイレに行っていました」

「へえ、そうなんだ」

とほっとした表情を唯先輩はした。

「んじゃ、合宿恒例のあれをやるか？」

律先輩が提案する。

「本当にやるのか？」

と体をぶるぶると振るわせる。恐らく、漣先輩がこんなに体を振るわせているということは怪談話でもやるのである。

「ありますよ」

「んじゃ、むぎよろしく！」

「うん」

そう言うのと、むぎ先輩は一回深呼吸をしても話している声より少しトーンを下げて話し出した。

「これは、この離見沢で起きた本当のお話です」

「聞こえない、聞こえない」

「漣先輩、まだなにも言ってませんよ」

「まあ、続けて」

律先輩は、むぎ先輩の話を続けせようとする。

「うん、分かった」

と怖がっている澁先輩をほつといて、話を続けるむぎ先輩。

「実は、この雛見沢では毎年、決まった日に殺人事件が起きるの」

「殺人事件？」

「でも、ただの殺人事件じゃないの。実は、今日この別荘に行く時、ゴミの山があつたでしょう」

「ありましたね」

確かに今日、別荘へ向かう途中大きなゴミの山があつた。

「あそこは昔、ダム建設現場があつたの。でもある日、そのダム建設の現場で作業員の死体が見つかった、しかもばらばらの状態で犯人は、同じ作業員達で殺しに関わったものに一人ずつに死体の一部を分けたらしいの、でも、まだ見つかってないの」

「なにが？」

唯先輩が、聞く。

「その死んだ人の右腕が見つからないの、ほかのところは見つかったんだけど右腕だけは見つからないの。その右腕を持った人がいまだに逃亡している。それからというものの、毎年その日に人が必ず一人死んでいくの」

「毎年ですか？」

「うん、そのダム建設に関わった人間が。その翌年、ダムの誘致派だった人が旅行先で事故に遭って死んでその翌年、神社の神主が原因不明の病にかかり死亡、雛見沢を水の下に沈めよとしたことでオヤシロ様の怒りにふれたから毎年起こるんだと村の人たちは思い、みんな『オヤシロ様の祟り』って呼んでいる………どうかな？」

「むぎ、すごい話だなあ」

「むぎ先輩、その話完成度高すぎますよ」

「むぎちゃん、すごい」

と私と唯先輩と律先輩は、むぎ先輩をほめる。

「すごかったですね、澪先輩？」

澪先輩の方を見ると、澪先輩は体から魂が抜けたような感じにいる。

「澪先輩！大丈夫ですか？」

「……」

私が聞いても、澪先輩はなにも返事をしない。

「んじゃ、もう寝るか」

「そうですね」

と言いながら時計を見ると、もう二時を指していた。

「お休みなさい」

そう言って私は、眠りに着いた。

合宿編 其の六

綿流し当日、私たちは古手神社に続く道に出来た出店を回っていた。

「りっちゃん、リンゴアメだよ。おいしそう」

唯先輩が、よだれを垂らして言う。

「本当だ、買って行こうぜ」

「うん、買っていこう」

そう言つて唯先輩と律先輩は、リンゴアメを買った。

「おいしいね」

と唯先輩が頬つぺたを抑えながら、おいしそうに食べる。

「おい」

鳥居の方から声がしたので振り向いて見ると、そこには手を振っている魅音さんがいた。そして、魅音さんは手を振った後、私たちがいる方に来た。

「どう、お祭り楽しんでる？」

「はい、楽しんでますよ」

と私が魅音さんの問いに答える。

「これ、おじさんがみんなにつて」

そう言つて魅音さんは、ビニール袋を渡してくれた。袋の中を見てみるとラムネが入った瓶が入っていた。

「ありがとうございます」

魅音さんにお礼を言つて私は、袋から取り出してみんなに配る。

「ありがとね、魅音ちゃん」

唯先輩が、につこり笑つて言う。

「お礼なんかいいよ、それよりもうすぐ開会の挨拶が始まるから行く」

と言つて、私たちは挨拶が行われる会場に向つた。

会場に着くと、もう挨拶が始まっていた。ステージの周りには人が大勢いた。

「あれ、あそこにいるの梨花ちゃんじゃない？」

唯先輩が指差して言う。唯先輩が指した方向には、巫女の格好をした梨花ちゃんがいた。あの歳で、巫女なんて大変だなあと思った。

「それでは、オヤシロ様の生まれ変わり、古手梨花ちゃんによる開会のあいさつです」

と司会者の人が言う。

「あ、う、魅音さん。『オヤシロ様の生まれ変わり』ってどういう事ですか？」

私は、疑問に思ったことを魅音さんに聞く。

「梨花ちゃんの家は、八代続いて女の子が生まれると『オヤシロ様の生まれ変わり』って言い伝えがあるの、つまり、雛見沢の神様の生まれ代わりってことになるんだよ。それで梨花ちゃんは八代目だからそうよばれてるの」

「オヤシロ様の……生まれ変わりですか」

私は、驚いた。そんな言い伝えがあったなんて。そう思っていると拍手が喝采する。もう、梨花ちゃんの挨拶が終わっていた。

梨花ちゃんの挨拶が終わった後、私たちは再び屋台を周り歩いた。そして、私はみんなに「トイレに行ってくる」という伝言を残して、昨日鷹野さんたちと待ち合わせの約束をした祭具殿に向った。

合宿編 其の七

待ち合わせの祭具殿に行くと、そこには祭具殿の扉を開けようとする鷹野さんと富竹さんがいた。

「鷹野さん、富竹さん」

と二人の名前を呼んだ。

「ああ、中野さん」

扉の鍵を開けようとしていた富竹さんが言う。

「あのう、そこって古手家と一部の人しか入れないじゃないんですか？」

富竹さんが開けようとしていた場所は、古手家と村の一部の人間しか入れない場所だと魅音さんから聞いていた。

「そうよ、古手家の人間以外は汚れを持ちこむから立ち入り禁止になっっている聖域なのよ」

と鷹野さんが言う。

「じゃ、鷹野さんたちはそれを知っていて入るつもりなんですか」

私が、再び聞くと鍵を開けていた富竹さんが

「開いたよ」

と言った。

「ありがとう、ジロウさん」

そう言うのと鷹野さんは、扉の方を向いて扉を開けた。

「梓ちゃん、ついて来て」

そう言っ鷹野さんは、祭具殿の中に入っていく。入ってはいけないと知っているのに、私は興味本意で鷹野さんを追って祭具殿の中に入っていった。

祭具殿の中に入ると、鷹野さんが懐中電灯を持って。

「ねえ、梓ちゃん。これ何か分かる？」

と聞いてきた。鷹野さんの目の前には、古い木材でできた大きな仏像が不気味に立っっていた。

「仏像ですかね？」

「これが、雛見沢の守り神オヤシロ様よ」

「これが、ですか……」

神社にある像よりはるかに立派だった。

「じゃ、本題に入りましょうか。『綿流し』の本当の意味」

私は、息をのみながら聞く。

「この村に住む人間には半分、鬼の血が流れていてね。時折、その人食い鬼の血が目覚ますと人里に降りて鬼隠しするっていう言い伝えがあるの」

「……お、鬼隠しってなんですか？」

初めて聞く言葉だった。

「生け贄をさらうことよ。そしてその夜には哀れなその犠牲者を頂くために綿流しの儀式が開かれたっていう」

「ど、どう言う事ですか？」

私には、まったく分からなかった。綿流しと鬼隠しの関係が

「梓ちゃん、人の臓物のことを『わた』って言わない」

「え、それって……」

私は、いやな予感をした。

「そう、梓ちゃんが思っている通りよ。ここまで聞けばこの祭具殿の中に入っているものが理解できるでしょう」

オヤシロ様の像の周りには、鎌やでかい鋏が壁に掛けられている。

「解剖道具よ、もっと怖く言えば調理道具かしら」

そのことを聞いて瞬間、私はゾツとした。『綿流し』の意味にはそんな怖い意味があったなんて

「どう、これで分かったでしょう。『綿流し』の本当の意味」

「……」

もう、どう言ったら分からなかった。

「梓ちゃん、今日の事は誰にも言っちゃいけないからね」

そう鷹野さんが言うとは私は首を縦に振って頷く。

「それじゃ出しましょうか」

と鷹野さんが言つて、私たちは祭具殿から出た。

祭具殿から出た後、私たちは古手神社の鳥居の前にいた。

「それじゃ、梓ちゃん。お休み」

「じゃね、中野さん」

そう二人が言う。

「お休みなさい、鷹野さん、富竹さん」

と言つて私は、別荘に向つた。

合宿編 其の八

鷹野さんと富竹さんたちと別れた後、私は暗い夜道を歩いて別荘に帰った。別荘に着いて中に入って先輩たちが寝ている部屋をのぞくとみんな、ぐっすりと寝ている。でも、部屋には唯先輩の姿がなかった。

「あれ、唯先輩どこに行ったのだろう？」

と言って廊下を見渡すと、周りの部屋は電気が消えているの電気が着いている部屋があつた。私は、不思議に思いその部屋に行く。部屋のドアを少し開けて中を見てみると、唯先輩が楽譜を見ながらギターの練習をしていた。

「唯先輩、こんな夜遅くに練習ですか？」

と言いながら、部屋の中に入る。

「あ、あずにゃん。どこに行っていたの、心配したよお」

ギターを床の上に置き唯先輩は、心配そうな顔をして私に抱きついた。

「すみません、ちょっと道に迷って」

嘘の言い訳を言った。まさか、立ち入り禁止の祭具殿に行っていたなんて口が裂けも言えない。

「それよりも、唯先輩。ずっとギターの練習をしていたんですか？」

「うん、なんか眠れなくてね」

唯先輩が、頭をかきながら言う。

「じゃ、私も一緒に練習してもいいですか？私もまだ眠たくないの
で」

「本当！ありがとう、あずにゃん」

私と唯先輩は、夜遅くまで練習した。

綿流しの翌日の朝、まだみんながぐっすりと寝ているのに私は朝早くから起きて別荘の周りを散歩していた。

「あのう、すみません」

と後ろから声をかけられたので後ろを向くとそこには、中年くらいの男の人がいた。

「何でしょうか？」

「私、興宮警察署で刑事をやっている大石といいます」

と警察手帳を見せる。どうやら、本物の刑事らしい。

「警察ですか？」

「ま、立ち話もなんですのであそここのバス停のベンチに座りましょうか」

とバス停を指差して言う。

「はい、分かりました」

そう言っただけで私と大石さんは、近くにあったバス停のベンチに座った。
「中野さん、この二人に見覚えありませんか？」

そう言う大石さんは、ポケットから二枚の写真を取り出して私に見せる。そこには、鷹野さんと富竹さんが写っていた。

「知っていますけど、なにかあったんですか？」

「実は、その写真に写っている男の人ですが昨日、亡くなりました」
『亡くなった』という言葉聞いた瞬間、私は言葉を失った。昨日会った、富竹さんが亡くなったなんて信じられない。

「……富竹さん、亡くなったんですか」

「はい、昨日の夜に。綿流しの日に亡くなった、この意味中野さんには分かりますよね」

「まさか、オヤシロ様の祟りですか。何があったんですか？」

昨日の夜に起きたことを聞くと、大石さんは手帳を取り出してページをめくった。

「昨日、私の部下が富竹さんの遺体を発見しました。時間は24時5分前、場所は街に行く道でちょうど舗装された道に変わるところです。その道の路肩で遺体を発見しました、地面いっぱい血と汚物を広げて」

想像しただけでも、吐きそうだった。そんな酷い状態見つかったな

んて

「検死の結果、自分の爪で喉を思いっきりかきむしり、傷つけてはいけない血管までも」

「自分の爪で、喉を」

恐ろしい、自分の爪で喉をかきむしり血管までもかきむしるとは

「薬物を疑いましたが、そのようなものは検出されませんでした。」

ただ、体にいくつもの外傷が発見されてね、何者かに暴行を受けた可能性があるんです。死亡時刻は、22時から23時くらいです」

その時間帯は、私と富竹さんたちと別れた時間帯だ。つまり、富竹さんは私と別れた後に殺されたということになる。

「鷹野さんの方は、どうなんですか？」

今度は、鷹野さんの事を聞いた。

「行方不明です、事件に巻き込まれた可能性が非常に高い。このままだと、富竹さんはオヤシロ様の祟りで死んだという事で片付けられてしまいます」

「そんな、祟りで人が死ぬなんて」

「そう言う事なんですよ、中野さん。祟りを信じていない人の協力が不可欠なんですよ。これ私の電話番号です、知っていることがあったらここに電話してください」

そう言っただけ渡されたのは、大石さんの電話番号が書かれた紙きれだった。

「それと、今日ここで話したことはすべて内緒ですよ」

「はい、分かりました」

「それじゃ、失礼いたします」

と言って大石さんは、ベンチから立ち上がり私が元々歩いていた逆の方向へと歩いて行った。

合宿編 其の九

大石さんと別れた後、しばらくそのベンチに座って空を見ていた。あの二人が死んだことが未だに信じられなかった。しばらく空を眺めてから私は別荘に戻った。

別荘に戻ると、唯先輩たちは起きて朝食の準備をしていた。

「あずにゃん、どこに行っていたの？」

私の存在に気付き、唯先輩が言う。

「ちよつと散歩に出かけていて、心配かけてすみません」

「んじゃ、食べるとするか」

律先輩が言う。

「はい」

と返事をして私たち五人は、朝食を食べた。

朝食を食べた後、私たちはこの何をするか話した。

「ねえ、今日はどうするの？」

と唯先輩が言う。

「そうだなあ、何しようか」

律先輩が考えながら言う。

「てか、私たちは練習が目的で雛見沢に来たんだから練習しようよ」

「そうですね、練習しましょうよ」

と澪先輩と私は、練習しようかと主張した。

「よし、じゃ練習しようか」

「そうね、練習しましょう」

私たちは、雛見沢に来てようやく練習することになった。

練習をするために私たちは、楽器を置いている倉へ向かった。倉に着くと、倉から楽器を持って再び別荘に戻り準備を始めた。

「久々に、ドラムに触るぜ」

そう言いながら律先輩は、ドラムを調節する。

「今まで、ずっと遊んでいたからな」

と突っ込みながらベースをチューニングしながら言う。

「そうですよ。遊んでいたから練習出来なかったんですよ」

「でも、梓も遊んでいたんじゃない」

「それは……」

律先輩が言ったことに対して、返す言葉もない。

「練習始めるぞ」

漣先輩の号令で練習が始まった。漣先輩のしつかりしたベース、律先輩の力強いドラム、むぎ先輩の優しいキーボード、唯先輩の頑張り屋なギター、そんな旋律を聞いた瞬間、緊張がほぐれ、音楽の世界に入り込めた。

練習を始めてから数時間経った頃

「疲れた〜、もう今日はやめないか」

疲れた顔をして律先輩が言う。

「ねえ、漣ちゃん。もうご飯にしようよ〜」

と唯先輩が漣先輩の体を揺らしながら言った。

「さつき、食べたばっかだろう。律もまだ出来るだろう」

「もう、限界」

と言いながら、二人は倒れた。

「しょうがないな、じゃ今日の練習はここまでにしようか」

「ヤッター!!!」

さつきまで倒れていた唯先輩と律先輩は、再び起き上がった。

「やれやれ」

と私は小声でつぶやく。

「ねえ、梓ちゃん」

後ろからむぎ先輩が声をかける。

「はい、何でしょうか」

「今日の朝、警察の人に会わなかった？」

私は、唾を呑んだ。朝、あんなにぐっすりと寝ていたはずなのに、むぎ先輩は今日の朝の事を知っていた。

「……いえ、会っていませんけど」

と嘘をつく。

「本当に、会っていないの？」

さらに問いただしてくる。

「本当に会ってませんよ。それよりむぎ先輩、お茶入れましょうか？」

と話を逸らす。

「そう、ありがとね」

むぎ先輩の言葉を聞いて私は、走って台所に向った。

台所に着いて、私がお茶を温めていると台所の横にあるドアが開き魅音さんが入ってきた。

「こんにちは、梓ちゃん」

魅音さんが笑顔であいさつをする。

「どうも」

頭を少し下げて言う。

「これ、差し入れ。後で、みんなで食べてね」

と魅音さんが右手に持っている袋を見せて言う。

「ありがとうございます」

そう言いながら、袋を受け取り冷蔵庫に入れる。

「ところで梓ちゃん」

「はい、何でしょうか？」

「今朝、大石っていう名前をした刑事さんに会わなかった？」

「えー！」

私は、驚いた。私が今朝、大石さんと会っていたことを知っていたのはむぎ先輩だけではなかった。

「会っていませんけど」

「本当、本当に会っていないの？」

さらに聞いてくる。

「本当に、会っていませんよ」

「会っていないんだね」

魅音さんはいつもより、トーンが下がった声をして言う。私の目の

前にいる魅音さんは、いつも明るいま音さんじゃない。

「会っていません」

「そう、もし大石っていう人が現れたらすぐに逃げてね、逃げないと危ないから」

「……分かりました」

「それじゃ」

そう言って魅音さんは、出て行っった。

「どうして、むぎ先輩と魅音さんは私が大石さんと会っていたことを知っているの、しかも危ないって……」

もう、どうしたらいいか分からなかつた。どうしてあの二人は朝の事を知っているのかそして大石さんと会うのが危ないのか疑問に思っった。あの時、誰にもあとをつけられていなかったし、人の気配もなかつたのに。どうして……

合宿編 其の拾

魅音さんが出て行った後、私はお茶をコップに入れみんなに出した後電話がある離れの建物に行き大石さんに電話をかけた。番号を入力して数秒後に繋がった。

「もしもし」

「はい、大石です」

電話に出てくれたのは大石さんだった。

「大石さん私です、中野です」

「中野さんですか、何かありましたか？」

「実は、さっき魅音さんと会いました」

「魅音って、園崎魅音ですか？」

「はい、それで今朝の出来ごとの事を聞いてきました」

「今朝の事とは？」

ライターをカチカチいう音を鳴らしながら言う。

「今朝、大石っていう人と会わなかったかって聞いてきました」

「それで何と答えましたか？」

「誰にも会ってないと、答えました」

「そうですか、他に何か聞かれましたか？」

「いえ、でも大石には気をつけるとか言っていました」

「そうですか」

「あのう、私これからどうしたらいいでしょうか？」

これからの事について聞く。

「……今まで通りの生活をしてください、それでまたなにかあったら連絡してください」

と指示をした。

「分かりました、では失礼します」

と言って受話器を戻す。

「梓ちゃん」

後ろから声をかけられたので後ろを振り向くとそこには

「やっぱり、会っていたんだね」

「梓ちゃん、嘘ついたね」

恐ろしい目つきと殺気を漂わせている魅音さんとむぎ先輩がいた。

「魅音さん、むぎ先輩!!」

私が驚いた表情を言うと、魅音さんが近づいて

「梓ちゃん、大石と会ってないって言ったよね」

と言ってきた。

「それは……その」

「梓ちゃんは、嘘をつかないと思っていたのに」

「むぎ先輩……」

むぎ先輩がいつもとは違うオーラを漂わせて言う。

「嘘ついた梓ちゃんには、罰を与えないとね」

「魅音ちゃんの言うとおりね」

そう言うのと、むぎ先輩が私の後ろに行き私の目の前に魅音さんが来た。そして、むぎ先輩が私を動けないようにする。

「ちょ、何するんですか! むぎ先輩」

とジタバタしていると魅音さんが

「動かないでね、罰ゲームだから」

そう言いながら、ポケットから何かを取り出し私に見せる。魅音が持っていたのは、病院とかで見る注射器だった。

「何するんですか」

「梓ちゃんには、分かるでしょう」

そう言うのと魅音さんは、私の右手を握り注射器を私の腕に近づける。

「やめて……やめて……やめてえええええええ!!」

と我を忘れ喉が潰れそうなほどの声を出した。そして……

「……私、どうして」

我を取り戻し、目の前にある現状を確かめる。息が荒い自分、血だらけの自分がいた。そして、私の目の前には

「これ……私が、私がやったの」

目の前には、無残に刃物で刺されて血を流している魅音さんとむぎ先輩がいた。顔もほとんど刺され誰が誰か分からないほどだった。

「どうして、こんなことに」

目から涙を零し手を床に着き言う。そして、私は近くにあった紙にこう書いた。

『魅音さんと、むぎ先輩は犯人たちの一味で富竹さんを殺したときに使用されたと思う薬が入った注射器はゴミ箱に入っています』

そう書いた後、電話機の横にあった電話帳にその紙を挟み建物から飛び出した。当てもなく走り続け、電話ボックスの中に入り大石さんに電話した。

「もしもし、大石です」

「お、大石さん、ですか」

「中野さん、何かありましたか？」

「……そ、その、あの、私」
声をかすれながら言う。

「落ち着いてください、中野さん」

「もう、限界です」

「限界って、どう言う事ですか!!」

「……大石さん、私オヤシロ様がいるとは思っていませんでした。ずっと付いてくるんです。やっぱりオヤシロ様はいるんだと思います。ずっと付いてくるんです。私の後ろを……」

もう限界だった、私は喉に手を置き喉をかきむしりだしていた。

「中野さん、あんたまさか、喉を」

大石さんの声がだんだんと遠くなっていく。目をだんだんと細くなりそして私は

「……ご、ごめん、なさい……」

そう、かすれた声で言う。私の目の前は真っ暗になった。

『雛見沢女子生徒殺人事件』私が起こした殺人事件はそう言われている。雛見沢で起きた殺人事件、犯人の中野梓は、琴吹紬・園崎魅音の両者を刃物で殺害、その後犯人は逃走し雛見沢で唯一の電話ボックス内で死亡しているのが発見される。その後、遺体があった部屋で犯人が書いたと思われるメモが発見される。そしてその内容は『園崎魅音と琴吹紬が雛見沢連続殺人事件の犯人の一味である』という内容だった。これが表向きの警察が発表した内容だがまだメモには続きがあった。

『どうしてこんなことになったのか、私にも分かりません。これを読んだ時には私はすでに死んでいるでしょう。これ読んだあなた、どうか真相を解き明かしてほしい、それだけが私の願いです』あの時私が、雛見沢に来た時うるさく鳴いていたひぐらしはこのことを教えようとしてうるさく鳴いていたかもしれない。

出 演

中野梓

平沢唯

田井中 律

秋山 澪

琴吹紬

園崎 魅音

前原 圭一
竜宮 レナ
古手 梨花
北条沙都子
富竹ジロウ
鷹野 三四
大石 蔵人

演出・シナリオ編集

坂田銀時

原作

ひぐらしのなく頃に
けいおん！

原作協力
けいおん！×ひぐらしのなく頃に
（作者長月実）

2011年5月18日

ひぐらしのなく日に製作委員会
記念作品製作プロジェクト

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4696t/>

ひぐらしのなく日に

2011年10月7日13時25分発行